

研究通信

No. 27

1958年6月刊
村研究会編集局

豊橋市町役場
愛知県
社会学研究会

社会学における二、三の問題について

一九五八年村研大会癡想として

(1) (北海道) 布施・铁治

こゝで私が述べることは、昨年の村研大会、とくに総括討論の際感じた二・三の問題点の素描にすぎない。

第一日の研究発表、第二日のシンボジウム「後藤農村の夢観」のあとの総括討論会においては、まず経済学と社会学との交流に関する基本的観点についての論議が、ついで、具体的に変貌をとげている農村、とくに部落の構造的変化に論点が集中した。第一の経済学と社会学の交流に関する論争は充分に行われたとは言ひ難い。しかし結果的に、ついで行なれた具体的に交換をとげて各部落の実例の報告が、今後の村落研究の将来に対する「きわめて豊かな成果を予測せしめた。

村落研究における経済学と社会学の交流の問題は、シンボジウムにおける後藤和夫氏の問題提起、最後における村落社会構造の変容、に因縁して矢木明夫氏から提出され、それは総括討論において更に展開せられた。喜多野清一氏は討論展開のための導入として、自らの所感を経済学と社会学の交流に關し、この交流は自明のことであるとし、「この両者のからみ合う場面として部落という一つの地域社会をとりあげ、日本農村社会の中における構造的方塊間の変化過程、内部構造の変化過程を問題とし、それに働く種々の要因、

そのとよよかの要因を論ずる形をとるならば、両者の側からの意見も少なく、「一つのまとまった路線もできる」と述べた。二、三の討論のあと島田謙氏はシンボジウムの終にあげる一部の発言者の発言に、經濟關係を單に外的な要因としてのみとらえるといふ欠陥があるとして「經濟關係を單に外部からの資本主義の影響という外的要因としてのみみるのではなく、よりの生産、イニの中の經濟關係（生産關係、流通關係、消費關係）の三者を含むが、とくに生産上の人民關係に重点をおく。」としてつかまねばならぬ。それがまた結局社會學自身の問題とも違なる」と述べ、後藤氏の問題提起に言及して、「寄生地主体制を基本にしての村落構造の類型化をいわば土地所有の關係に限って問題にしたが、寧ろ、その土地といふ生産手段を使って人間が如何なる労働關係を結ぶかという問題も当然大きな問題である」とし、經濟關係を内約要因としてとりあげることの重要性を社會學自身の問題として提示した。この場合、商品經濟はつねに生産、流通、消費上における人間の社會關係を伴って現象するものであり、この意味で經濟學は人間の社會關係のうちの一部分をとりあつかうのであるから、當然、社會學と共通する部分があるという前提が横たわる。

村落共同体内外における人間關係を生産關係を媒介として問題とするところには、島田氏の指摘をまつまでもなく必要なることであるが、經濟學と社會學の交流という問題は村落共同体内外における社會關係をとりあつかう科学として單に共通の部分をともにもちあうとあら以上のものでなければならない。すなわち、そこには、村落共同体ととらえる際の対象のものがからめられ、それらの方法上における特色を自覚した上で、その交流がなければならない。かかる従来の方法論の自覚の上にたっての交流の結果からは、村落共同体の科學、でも言わざるべきものを私たちに期待できるが、單なる場合から後、それは期待できない。このような意味において、自らの立つ學問的方針に対しても較成な態度がのぞまれるわけだが、この論争はその後、理論的には展開されずに、具体的に交換をとげる農村の豊富な教訓への実例をもつて終えられた。

研究者の交流はもはや西洋のことが多く知れな

い。しかしこのとき、社会学の側から理論的

な統一的見解がなされなかつたところ事實に

何より私たちは目を向けなければならぬ。

そしてかゝる社会学における統一的方法論の

虚弱さこそが、「社会学的どう嘲笑」をす

ら呼びあこと基因になつてゐるところ事實を

指摘した。私たゞこと日本社會同社會を石

本資本主義社會に歴史的に位置づける際に混

迷が生じてゐるようと思われる。これは從來

の社會學思想の超歷史的性格から脱却せんと

する試みのための嘗述とも見える。こゝにあ

らたてて述べるまでもなく、社会学における

村落共同体の把握は、翁木栄次郎氏の諸集団

の重複地区としての地域的彼のものである

社会規範を有する自然村概念を中心とした

方法、有賀喜左二氏の家道會の概念を中心

とした方法、さらに吉武直氏の組織化、同族

結合による村落における家結合の別による先

進、後進の二種別による把握などをとおして

もしめしてくる。こゝこれらを詳細に検討する余裕はない。たゞ、今後、村落共同体把握のため必要と思われる二、三の点を聞こへて、問題点のみ提示したい。

①経済学の対象とする領域が村落共同体の範囲である様に、社会学における対象は村落共同体内の社会關係であり、それは經濟關係とされるべき關係を含むところの意味で生態關係を含むところの社会關係を問うとするとき、そこには対象範囲の特徴があり、それが「村落共同体の社會關係」とは異なる方法が生じてくる。

②例えば、社会学における村落構造の把握は次のように考えられてもよしと私は思つてゐる。すなはち、村落における人間關係の構造は早に生産・流通・消費の關係を基軸としてみられる以上で、これらの階層性を貫いてゐる生活の構造とそれを規定していく共同規制とどう關係からと考へるべきだと思う。例えば、「經濟外的規制」という形で説明される現象は、封建的人間關係とおく前に、ひとまずそれと可視にしてゐる村落における生活の仕組や、日常生活の論理をとくほぐして、その中から、この村落の社会關係の本質づけをしようとする。またこうした問題もある。それは村落においてある人々の所持とは別に、それが經濟の本質、カトクが決めてくる

たり、生活圏が拡大して行つたりする側面である。これらの生活の枠組の変化が共同体的規制の変化となるし、生活の論理の変化となつて、生活の中にみられてくれる。日本資本主義社會の中におけるこれらの現象の發展形態の中には如何なる法則性が存するのだろうか? 村落における生きた歴史的な生活の枠組としての社会關係の型の發展法則については、今までに知られてこないあまりに多くのことがある。翁木氏はその自然村構成を提示した。農村社会学原理において、それが「現時の日本農村の基礎的社會構造及び農業に關する組織的・研究」であるなどを述べてゐる。翁木氏の立論のウイーランド・ボイジンの「ある階級的支派」に関する箇面に対する点においては、農業科学の学者が多くものを採取しなければならないが、これと構造的關係をもつ行政的地域集團といわれるもの、氏子集團といわれるもの、櫛使集團といわれるもの、郷中集團・近隣集團・經濟的集團、官設的集團・血縁内集團といわれるべきもの、基本的構造は具体的に如何なる変化を示していくのか、これらを規定するムラの社会意識は如何なる形で変化し、これらの現象の法則として如何なるものを提示できるのか? 日本資本主義社會の特質は、すでに概念的な枠組として外から与えられているのではなく、あくまでも人間の社会關係の型の変化として村落共同体の中に与えられている。

③特定の村落共同体の社会關係の型を歴史的に位置づける際に、その範囲を生産諸關係に求める行き方もある。それ自身必要なこと

でありあやまりではなく、けれどもそれは現象の構造説明の一つのおきかえにすぎない場合がしばしばある。その前にまずなさねばならぬことがある。つまり隕接論科学の成果の上に準拠しつゝ行われる一つのおきかえ的操作とこう方法以上に、更に、生産關係の変化をその中に含みつゝこれによって規制され、またこれを規制している社会關係の型の発展の法則を、生活の構組の変化として、また共同体的規制の変化としてとらえるべく努力すべきであつて、また、社会關係の型を並置關係との関係で説明しようとする場合、後者はたゞ單に説明概念としてのみ用いらるべきではない。その相互に規定しあう複雑な相互作用の法則の説明とでも言わるべきものに主眼をむけるべきであると思う。

一はんにかゝる側面からする村莊共共同体の把握は、きわめて立遅れを示しているが、これを克服するためには隕接論科学から多くの成績を学ぶとともに、社会學の諸古達の種々の先駆的業績にも多くのものを学ばなければならぬことをここに強調したい。

私は非常に複雑な形で問題点のみを提出したが、更に立ちいた検討と、実証により問題を深めたい。